

インクルーシブ マネージメントの普及

～医師等専門家と連携したADHDの指導を通して～

学校名 各務原市特別支援教育推進部会

所在地 〒504-8555
岐阜県各務原市那加桜町1-69

1. 研究の経緯と背景

本会は、平成19年「共生社会の形成の基礎となり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味をもつ」の理念のもと全国展開した特別支援教育と同時に活動を開始した。

平成24年度までの6年間毎年小中学校教員向けのフォーラム・研修会を地道に開催してきたが、そのねらいは「地域に根ざした特別支援教育」である。実践を累積する中、「地域に根ざした特別支援教育」とは「学校主体の特別支援教育の推進」であると定義するようになり、推進の最大の柱を特別支援教育対象児を包み込む学級経営と捉えて市内の全小中学校で行えるようにしたいと考えるようになった。タイムリーなことに平成24年度7月に文部科学省より「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」が示された。

インクルーシブで地域に根ざした実践を広めるチャンスと捉え、対象児を焦点化した実践を行うことにした。具体的には、発達障害の中のADHDと発達性協調運動障害の児童である。取り上げた理由は、「①全ての担任がADHDや発達性協調運動障害の傾向児の指導を経験している。②ADHDの傾向児か診断児が分からず指導がされて集団不適応を起こす場合がある。③ADHDに効果的な薬があり、医療との連携指導による成果を1年以内でみることが可能である。」の3つであり、研究課題の具現に繋がると考えた。

2. 研究の目的

平成24年12月文部科学省が小中学の6.5%に発達障害の可能性があると発表したのに対し、各務原市独自の調査では13.9%・1750人であった。どの学級にも3～5人がいることになる。その殆どが通常学級に在籍して指導を受けており、担任が個の特性に合った指導ができず、校内の支援体制がないと反抗挑戦性障害の様相をみせることが珍しくない。

医療等専門家と連携したADHDの指導を通して、通常学級に在籍する発達障害のある児童が学級の中に包みこまれるインクルーシブマネージメントの普及が目的である。

3. 研究の仮説

研究の目的から仮説を「医療等専門家と連携し、ADHDの特性に合った指導を担当が継続的にすれば、学級適応の姿が生まれ、その指導法を管理職や市教委が校内に広めることで学校主体の特別支援教育が市内に普及していく。」と設定し、仮説を検証する実践研究を展開した。

4. 研究の方法とその内容

1) 担任の継続的指導 A 医師・大学教授等による研修講座の開催 B 指導者研修会への参加	2) 専門家の学校訪問 A 医師の医療アドバイス B 大学教授の児童理解アドバイス
3) インクルーシブマネジメントの普及 A タブレットを使った個別指導 B TV電話による教育相談 C 特別支援教育まとめの会 D サテライト講座 E 冊子・DVDの作成と配布	

5. 研究の経過

1) 担任の継続的指導

A 医師・大学教授等による研修講座の開催

子どもと対峙する担任が ADHD の行動特性を理解して、指導を工夫や継続に繋げていくことから始めることが重要と考えた。医師・大学教授・特別支援教育士 S V による 6 回の講座を開催し、希望者に録画 DVD を渡して指導の定着に活用してもらった。

第 1 回 6 月 3 0 日 【ADHD 等発達障害の理解】

「子ども理解と見立て」「子どもと教師の困り感」「指導にあたっての手立て」この三つに関連した事柄を事例的に説明する。

第 2 回 7 月 7 日 【K-ABC 検査の概要とプロフィールの読み取り】

K-ABC の検査内容の概要を知り、検査結果のプロフィールから個の特性を考え、事例検討を行い個の特性の伸ばし方を考える。

第 3 回 7 月 2 8 日 【感覚統合と発達協調障害】

感覚統合的アプローチの療育における意義、発達障害の感覚・知覚等その特性をふまえ、指導に関するポイントを事例にそって説明する。

第 4 回 8 月 4 日 【医療的立場からみた（脳科学含む）発達障害（ADHD）の指導】

薬物療法の適応と大脳皮質の主要な構造と機能等、発達障害と関連する医学領域に関する知識の基本を説明する。

第 5 回 1 1 月 1 7 日 【検査法演習 新版 K 式発達検査 2001】

検査のねらいや「姿勢・運動領域」「認知・適応領域」「言語・社会領域」の 3 領域の構成を知る。発達年齢換算表からの全領域や各領域ごとの発達年齢及び発達指数の算出の仕方とその読み取り方を説明する。

第 6 回 1 1 月 2 3 日 【検査法演習 新版 K 式発達検査 2001】

プロフィールの読み取りと実習を行い、二日間のまとめを行う。

B 指導者研修会への参加

ADHD の行動特性を理解して指導の工夫や継続に繋げていくために実践的研修が必要不可欠と考えた。ADHD の児童を行動改善を目的に行われている市教委主催の「かかみがはらサマースクール」に参加し、実際

のSST（ソーシャルスキルトレーニング）指導に携わった。

	目的	般化
1日目 仲間関係に関する スキル	★先生や友だちの名前を覚えて、仲良くなる。	KSS や学校の先生や友だちに話しかけるときの名前を呼んでから話す。
2日目 集団行動に関する スキル	★ルールを守って、楽しく活動する。	KSS でのゲームや学校での遊び、班活動、話し合いなど。
3日目 セルフコントロールに関する スキル	★勝ち負けに対する気持ちのコントロールをする。	ゲームの時間や学校でのジャンケン、遊び、試合など。
4日目 集団行動に関する スキル	★リーダーになる人や大人の指示に従う。	「車を走らせて遊ぼう」「サッカーをしよう」や学校での全ての活動。

2) 専門家の学校訪問

A 医師の医療アドバイス

医療の専門家が学校現場に入って直接、担任にアドバイスすることで、発達障害傾向児童の正確な見立てができる。

また、学校と医師が保護者の了解を得て、直接児童の情報を交換しながら、学級適応を図る指導を日常的に行なうことで、担任が、ADHDの子への指導継続に自信がもてると考えて実践を行なった。小学校抽出4学校を2ヶ月に1回、医師と指導主事が下記の回数訪問し、医療アドバイスを行った。

4月	2回	5月	2回
6月	2回	7月	2回
8月	1回	9月	2回
10月	2回	11月	1回

ストラテラ [5・10・25 mg]、**ストラテラ5mg**、**ストラテラ10mg**
 ・すくには効果が現れない
 ・たまたま飲み忘れても大丈夫
 長期服用
 見逃し見逃し見
コンサータ [1.0・2.7 mg]、**ストファブ40 mg**、**ストファブ322B**
 ・その日のうちに効果が分かる
 ・飲み忘れると元に戻る
 当日服用
 ま心に覚え見
効果
 大脳や脳幹といった中枢神経にはたらきかけて、**精神活動を活発にし、神経を覚醒**
 (かくせい) させる作用をもつ薬です。
 ・主に小児期における、**注意欠陥・多動性障害(ADHD)**の治療に使います。

リスパダール [1・2・3 mg]、**リスパダール内服液** [0.5・1・2 mg]、**リスパダール1mg**、**リスパダール2mg**、**リスパダール3mg**
 ・イライラやムカムカ、自分で抑えられない衝動、落ち着かない時に使くと、落ち着くことができる。
 ・運動時や夜の静かで、効果がたいていよく出る。
 即時作用があり、**高機能自閉症やADHD**に、落ち着かせる際などに、**使用**。
効果
統合失調症の治療に用いられる薬です。
統合失調症・老年精神病・うつ病または**うつ状態・神経症**における**鎮静催眠効果**のある薬です。最近のものは副作用が少なくなっています。

訪問時に使用した医療資料

【改善した具体例】

- ・ 医師が入る前は、仲間を蹴り倒し、顔を踏みつける事件をおこして校長が直接指導した4年男子児童



- ・ 医療訪問三者連携指導を1年間行ったところ落ち着いて仲間と学習するようになり、2学期からは、校長や仲間や担任が誉めるまでに改善した。

【成果のまとめ】

- ・ 子どもの安定が生まれ、保護者の教師に対する厚い信頼が得られる。
- ・ 発達障がい傾向児を通常学級で指導する教師の自信が生まれる。
- ・ 随時メールにて情報交換ができ報告・連絡・相談が機能的にできる。
- ・ 学校だけでは進まなかった投薬治療を取り入れた指導が実現し、児童の姿が変容した。
- ・ 医療面からの見立ても取り入れることによって、より正確な児童の姿が捉えられた。
- ・ 学校から保護者に伝えにくい内容が医師から伝えられ適正就学指導が進んだ。

B 大学教授の児童理解アドバイス

市教委主催の特別支援教育巡回相談で、講座講師の大学教授が、児童理解を直接、管理職や担任にアドバイスすることで、教員の資質向上が図られ、学校体制でADHDの子に対する指導に取り組む姿勢が生れると考え実践を行なった。

この巡回相談では、学校で主体的に取り上げられた児童生徒について教育・心理・医療などの専門家をまじえて話し合う機会をつくった。

話し合いの中で、指導上の見立てや手立てを見つけ出す努力をし、その手立てを実践した結果どのように児童生徒が変容したかについて、後期の訪問で確かめ合った。

一つの取り組み事例が広がり学校内の指導体制を強化し、校内外において特別支援教育が推進していくことを期待した。

毎回、話し合の中で提示する必要な資料を助成で購入した小型プロジェクターでタイムリーに提示し、ケース会議を行った。



小型プロジェクターを使ったケース会議

副題として（早期支援）をつけた。就学前の0歳から15歳までを繋いだ支援・指導体制をつくり、少しでも早めに特性をみつけて、支援・指導の手を入れていこうという早期支援の体制が重要になると考えたからである。幼保・福祉の里等の就学前の情報を小学校に引き継ぎ、低学年のうちに特性に対する支援・指導を継続し、4・5年後には不登校状況が減少したり、学校全体の学力が向上したりすることを目指した。

3) インクルーシブマネジメントの普及

A タブレットを使つての個別指導

不注意優勢について集中力を高め、興味・関心を生んで指導するのにタブレットPCは、効果があった。

同時処理が得意な児童には、画面全体をみてキャラクターを進めていくゲームを提示することで、集中力や活動意欲が高まった。

特に、フリーソフト「筆談君」は、「書き」が苦手だが、継次処理が得意な児童生徒に対して、発達段階に合わせて対面で指導が出来るため、意欲的に学習する生徒の姿がうまれ有効であった。



同時処理ゲーム



継次処理ソフト

B TV電話による教育相談

- ・特別支援教育コーディネーターの実践力（調整力・伝達力）を高める。
- ・特別支援教育コーディネーターの企画のもと、発達障がいの見立てや指導・不登校児童・生徒への指導・本人や保護者への障がいの等、校内で抱える問題に対する相談を行う。

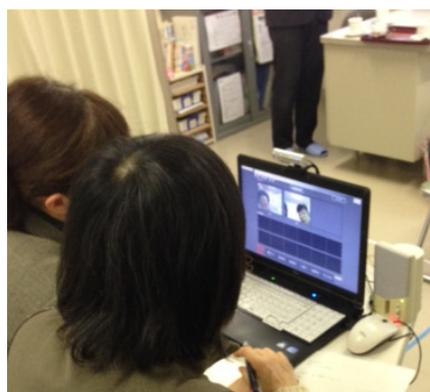
以上を目的に、各小学校の特別支援教育コーディネーターが中心となって行った。

相談対応者は、山形大学三浦光哉教授、相談会対象者は、担任、保護者等である。

相談場所は、山形大学 三浦研究室と市立図書館3F学習支援センターとTV電話相談システムが設置されている通級指導教室であった。

下記の星印から最も相談したい内容を事前調査票を作成して教授に送信した上で行った。

- ☆ 発達障がいの見立て関係
 - ・学習障害関係
 - ・不注意欠陥多動性障害関係
 - ・自閉症関係
- ☆ 発達障がいの指導関係
 - ・学習障害関係
 - ・不注意欠陥多動性障害関係
 - ・自閉症関係
- ☆ 不登校関係
- ☆ 障害特性の伝達関係
- ☆ 起立性調整障害が・緘黙関係
- ☆ ネグレクト・虐待関係
- ☆ 福祉・医療等他機関との連携関係



担任と特別支援教育コーディネーターが山形大学の三浦光哉教授に ADHD 傾向児童の通常学級で指導を TV 電話教育相談の様子

C 特別支援教育まとめの会

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」を受けて、各小中学校の教育相談担当者と特別支援教育コーディネーターに対し、本年度の実戦の紹介と講座講師の大学教授による講演会を開催した。

演題は、インクルーシブマネジメントの基本である「子どもの見立て（理解）」であった。

D サテライト講座

将来的に、多くの指導者が、この相談会を聴講して研修が出来るようにと考え、サテライト形式での相談会を行った。

相談内容は、通常学級に発達障害傾向の児童が多数いた場合のインクルーシブな指導法であった。難聴からくる行動特性も指導された。どのような個別指導や学級経営を行うとよいかを聴衆から質問される場面も合あり、聴衆を含めた研修となった。

E 冊子・DVDの作成と配布

発達障害の指導DVDを作成し、SST（ソーシャルスキルトレーニング）やパニックになった時のタイムアウトの手法を編集した。また、医療と連携した発達障害の児童・生徒への対応の冊子も作成し、どのページからでも気軽に読め、子どもの見方や指導の参考に出来るようにした。

DVDと冊子を各小中学校に配布して市内への普及を図っていくことにした。



5. 研究の成果

- ① 定型発達児童・生徒への指導とは違う個々の困り感・特性に合わせた指導が行われるようになり、発達障害児童・生徒を学級に包み込むインクルーシブ・マネジメントが普及した。
- ② 医療等専門家との連携指導の具体とその成果により学校と医療の連携指導が確立され、名古屋女子大宮脇名誉教授との特別支援教育巡回相談でのケース会議と山形大学三浦研究室とのサテライト形態を含むTV電話育相談を平成26年度以降も各務原市として継続する道が開け、発達障害児の指導研修会を市教委が夏季研修として開催することにつながった。
- ③ 発達障害の指導DVDや医療と連携した発達障害の児童・生徒への対応の冊子が市内小中学校に配付できるようになった。